

日本の大学による短期留学実践を通じた 異文化間シチズンシップ教育

ギャレス ハンプリーズ
崇城大学

宝来華代子
崇城大学

概要：日本の高等教育における国際化プログラムとして、短期留学は一般的に推奨されている。また、国際的な繋がりやアイデンティティを築く機会として、学生たちに短期留学はよく選択されている。しかし、短期留学を通じた国際的な繋がりやアイデンティティ形成について、大学の教育機関での検証は不十分である。本論文では、異文化間シチズンシップ教育が短期留学の発展にどのように効果的であるかを検証するための1つのアプローチとして提案する。国際的なアイデンティティ形成に繋がるシチズンシップに焦点をあて、高等教育の国際化政策と学生の短期留学への動機づけを関連づけて検討する。本稿の質的研究では、学生18名の振り返りの記述をもとに日本の大学における短期留学の実践について検討した。その結果、短期留学の教育実践において異文化間シチズンシップは限定的であることが示された。多文化背景のキャンパスでは非公式な教育機会を通し、ある程度の異文化間シチズンシップが高まる一方で、グループツアーではアイデンティティ形成の目標が達成されていないとの報告もあった。実践の改善を通じた異文化間シチズンシップ支援の方法を提案する。

キーワード：短期留学、異文化間シチズンシップ、日本の大学生、高等教育の国際化、異文化学習

Intercultural Citizenship in the Short-Term Study Abroad Practices at a University in Japan

Gareth Humphreys
Sojo University

Kayoko Horai
Sojo University

Abstract: *Short-term study abroad (STSA) is commonly promoted in higher education internationalisation initiatives in Japan, and often selected by students, based on opportunities to form international connections and identities. However, the extent that international connections or identities are formed through STSA is often not examined within institutions. Intercultural citizenship education offers one approach to examine how this development on STSA is effective. In its focus on extending citizenship towards international identifications, it is relevant to higher education internationalisation policies and common student STSA motivations. In this qualitative study based on the reflective writing of 18 students, STSA practices and provisions at a Japanese university are examined from an intercultural citizenship perspective. Findings showed limited integration of intercultural citizenship in any educational practices. While informal educational opportunities on culturally diverse campuses provided some basic intercultural citizenship experiences, group tours were accompanied by reports of unfulfilled objectives around forming international identifications. A pathway which may support intercultural citizenship through reformed practice is provided.*

Keywords: *Short-term study abroad, Intercultural citizenship, Japanese university students, Higher education internationalisation, Intercultural learning*

1. はじめに

日本の大学において国際化の観点から短期留学プログラムは推進されている政策 (Yonezawa, 2014) である。これらの短期留学での海外への一時的な滞在は「教育目的で実施される」(Kinginger, 2009, p.11) が、様々なタイプのプログラム (例: 語学や研究、文化ツアー、スタディーツアー) を通し、教育機会が提供されている。これらのプログラム促進は、「国際的、異文化またはグローバルの側面を大学教育の実践機能に統合するプロセス」(Knight, 2008) とする大学の国際化の取組みの一環として行われている。短期留学の機会には国際化に寄与する可能性がある (Jackson, 2020)。異なる文化的視点を理解し、新しい考えや意見に対する敬意と開放性を示す能力の育成としての異文化学習は、海外の文脈がそうした学習に最適であるという認識から、短期留学参加によって自動的に得られると期待される (Hernández & Alonso-Marks, 2018)。しかし、異文化理解の学習支援は、出発前後の異文化トレーニングやサポートなど、制度的な教育支援の役割が重要である (Messelink, van Maele & Spencer-Oatey, 2015) が、必ずしも大学で十分に実施されているとは言えない。さらに、日本の大学では短期留学のプログラム規定内で提供される教育の質の検証が不十分で、国際的な繋がりや異文化学習がどの程度形成されているか不明確であることは問題である (Koyanagi, 2018)。

教育機関での短期留学のプログラム規定内での実践で、国際化の異文化教育の側面がどのように促進されるかを調査することは重要である。本稿では、異文化間シチズンシップ教育が短期留学の発展にどのように効果的であるかを特定の教育機関を対象として検証する。そのための1つのアプローチとして、短期留学の経験と異文化間シチズンシップ教育を関連付け、検証を行う。異文化間シチズンシップ教育では学生が自国における積極的なシチズンシップを促進すると共に、国際的なアイデンティティの育成と異文化間学習を促進するアプローチが提供される。この概念は、個人の文化的多様性の尊重と国際社会に対する責任の構築に焦点を当てたものである (Boonsuk & Fang, 2021)。

本研究は、18人の学生の留学前、留学中、留学後の一連の留学プロセスでの体験を通して、日本のある教育機関の短期留学の実践と留学プログラム規定の質の理解を目的とし、文脈的側面や関連性、異文化間シチズンシップに対する教育的含意を構築し、関連付ける。異文化学習や国際的な繋がりとの関係性を考慮した短期留学プログラムでの有効性について考える様々な大学の実践教育者に理論的な洞察を提供することを目指す。

2. 研究の背景

2.1 短期留学の方針や実践

1980年代以降、文部科学省の高等教育政策において国際化は顕著となり (Horibe, 2002)、教育効果の向上を目指す国の指針 (Ku, Kelly & Phillipson, 2015) として、留学が促進されてきた。短期留学推進における参加や奨学金のための政府予算拡大が重点的に行われ、2004年、文部科学省が設立した日本学生支援機構 (JASSO) は、8日間から3ヶ月間の短期プログラムに資金を提供する新しい奨学金を設定した (JASSO, 2021)。その結果、プログラム数や参加率が増加し、2016年には約10万人の学生が参加した (JASSO, 2018)。しかし、これらの参加率とは3日間の旅行も含められ、大半は1ヶ月より短いプログラムであった (McCrostie, 2017)。日本政府が制定し資金提供しているプロジェクトには、日本再興戦略、Go Global Japan プロジェクト、大学間交流プロジェクト、トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラムなどがある (Ota, 2018; Saito & Kim, 2019)。政策的には、国際的な場で活躍するた

めの語学力や異文化対応力を軸に、国際協力や学生の大学卒業後に世界観を構築したグローバル人材への成長などが重視されている (Sugimura, 2015)。2011年に「グローバル化推進人材育成協議会」が設立され、教育機関に留学機会の提供が奨励され (Yonezawa, 2017)、現在では日本のほとんどの大学が短期留学選択の制度を提供しており (JASSO, 2018)、国際交流や異文化学習、グローバル人材育成に関する大学の方針は、ウェブサイトや資料で紹介されている。しかし、この数年はコロナ感染症拡大により留学への参加が制限されていた (MEXT, 2021)。

留学推進の方針と実践は、各大学の状況によるが、一般的には日本の大学では、国際交流センターを設置し、国際センター長や事務職員が配置されている (Yonezawa, 2017)。教育成果の検証より、参加者の増加に焦点が当てられることが多い (Koyanagi, 2018)、国際化に対応する過程や教育面の支援が不十分な可能性がある。実際、必ずしも実際の教育的な取り組み、例えば出発前研修、滞在後のサポート、短期留学経験の再設計などの支援やプログラムの改変などに対し、積極的な関わりを伴っているとは限らない。従って、国の政策、文部科学省の投資、短期プログラムの人気を考慮し、教育機関の見解や戦略における方針が、実際にどのように達成されているのかについて理解を深め、検証していくことは重要だろう。

2.2 異文化間シチズンシップ教育

異文化間シチズンシップ教育 (Byram, 2008) は、グローバルな社会における個人とコミュニティの責任を高めるための枠組みである。この教育は、言語教育の国際化とシチズンシップ教育の行動志向を統合している。異なる文化や言語を持つ人々とのコミュニケーションや協働を通じて、地域社会や国内外のコミュニティの活動促進を兼ねている (Byram, 2008)。異文化間シチズンシップ教育における「シチズンシップ」とは、地域、地方、国家、国境越え、地球レベルといった様々なレベルのコミュニティに属するという主観的な感覚であり、異文化間シチズンシップ教育では、新しい国際的なコミュニティとアイデンティティを形成することが重要である。これらのコミュニティは、多様な文化的な要素から構成されており、新しい国際的なグループ内での協力、協働やこれらのコミュニティ内での新しい国際的なアイデンティティを意味し、母語使用者や文化社会の規範に縛られるものでない。これらの多言語コミュニティは、複数から成り立つ文化的な価値観、信念、行動のうちの1つ以上の組み合わせから構成されている (Wagner & Byram, 2018)。Byram (2008) は、教育が個人の変化に向けて自分の経験を振り返ることをどのように助けることができるかを説明し、その特性について以下のように述べている (p.187)。

1. 異文化間シチズンシップのきっかけ／促進、及びそれらに関する分析と考察、さらなる社会的／政治的活動の可能性、すなわち合意された目的を達成するために他者と協力する活動；
2. 個人における学習／変化の創出：認知、態度、行動の変化、自己認識の変化、他者（すなわち異なる社会集団の人々）との関係の変化、特定の文化に基づくが普遍的なものに関連する変化。

異文化間シチズンシップ教育の目的は、異文化の知識、スキル、および態度に個別の変化をもたらし、異なる視点と実践が存在する多文化のコミュニティで積極的に活動するための教育体験を促進することである。他者との協働作業による教育体験を通し、更なる理解や活動に繋がる可能性がある。他者との協同学習の具体的な例は、地元での出版物に記事を書く、学校でのプレゼンテーション、YouTubeなどを

使用したビデオプレゼンテーション、通行人への取材などが挙げられる (Byram et al, 2017)。短期留学では、異文化間シチズンシップを育む機会が限られていることもあるが、課外授業や非公式な活動は、学生同士のコミュニケーションを増やすことができる (Fang & Baker, 2018; Baker et al, 2022)。例えば、「国際的な友人との余暇、映画鑑賞、音楽、旅行、料理、寮での食事、ボランティアプロジェクト」(Baker et al, 2022, p. 5) などが考えられる。

異文化間シチズンシップ教育の改革は、多文化コミュニティ内で新しい国際的な思考と行動に向けて、あらゆる文化的視点に挑戦し、協力することを含む。そのため、個人は、自らの文化的偏見や異文化の多様性の理解を認識し、「新しい国際的な行動様式に向けて、国家文化／思考様式との同一性を保留する」ことを学ぶ (Byram et al, 2017, p.xxvi)。また、グループ内の新しいアイデアや視点に対する内省は、「常識」に変化をもたらし、新しい行動や視点を身につけ、学生はコミュニティ内の他者との繋がりを通して社会的アイデンティティを育むと主張し、多文化コミュニティでの新しい経験や状況を振り返ることで、人は自分の行動や視点を変えることができる」と説明する。異文化間シチズンシップ教育は、対象文化や対象言語の思考から移行することで、多文化・多言語という特徴に深く関わるが、多くの短期留学の場合は、特定の英語圏の国々に関連している。従って、シチズンシップ教育は、多様なコミュニティに参加し、アイデンティティを形成することができるために母国語話者との交流に限定されず、異なる言語や文化に開かれた包括的な目標とされる (Fang & Baker, 2021)。過去の研究では、アルゼンチンとイギリスの学生間の相互活動を含むクラスプロジェクトで発展した批判的な視点が強調され、異文化間シチズンシップの発展において相互作用の役割が議論され (Porto, 2014)、異文化間シチズンシップに対する学生の理解に複雑さが主張されている (Golubeva, Wagner & Yakimowski, 2017)。また、より体系的な教育が、国際化政策の文脈で、国際人としてのアイデンティティの発展に効果的であることが明らかとされている (Han, Li, Hongtao & Yuqin, 2017)。さらに異文化間シチズンシップは、一部の留学の教室指導においての学びでは限定的であり、教室外の活動を通しより深い理解や発展の可能性があることが示されている (Fang & Baker, 2018)。

異文化間シチズンシップ教育は、国際化、特に異文化間の側面に関する大学の意向と結びついているが、このような短期間の海外体験の結果として、異文化間シチズンシップが大きく変化する可能性は低いかもしれない。本研究は、日本のある教育機関における短期留学の教育実践と規定の中に、異文化間シチズンシップ教育がどの程度存在するのかを、他の実践者の経験と共感できる可能性がある方法で調査する。

3. 調査方法

3.1 調査背景

本研究は、日本の総合大学(言語系の学部学科は無い)の学生を対象に実施した。調査対象の大学では、必須科目として英語コミュニケーション(I~IV)が、1、2年生を対象に毎週2回、(1回90分授業)提供されている。同大学での留学プログラム運営は、国際交流センターが2015年に設置され、センター職員が業務を担っているが、2019-2020年度には、266名の学生が様々な留学プログラムに参加した。短期留学の目標として「日本や世界で活躍できる行動力と、ローカルとグローバルの両方の視点から協働できる柔軟性」などと、グローバル人材の育成を重視し、「海外体験を通じてグローバルな視野を持つ」「主体性を高める」「異文化の中でさまざまな生活・考え方を体験する」「柔軟な心を養う」を目的とし、これらは異文化間シチズ

日本の大学による短期留学実践を通じた異文化間シチズンシップ教育
ンシップの原則に関連していると判断する。

3.2 調査方法とリサーチクエッション

以下の研究問いは、異文化間シチズンシップ教育に基づく特定の大学の短期留学教育実践と提供についての理解や構築に役立つように設計された：

日本の大学における短期留学の実践と提供を通し、18人の日本の大学生の軌跡において異文化間シチズンシップ教育の機会をどの程度、提供していたか？

検証は短期留学帰国後の学生に自由形式の質問（付録参照）に対する自身の振り返りを文章で記入し、そのデータを基に質的検証を行った。質問事項は、学生に電子メールで送られ、収集したデータは質的データソフトウェア Nvivo 11 に取り込み分析された。本研究は、異文化間の発展を追跡調査するものではなく、留学前、留学中、留学後の教育経験の過程で、異文化間シチズンシップ教育がどのように確認されるかを調査する。短期留学の実践に関連する文脈的側面を理解するために、大学のウェブサイトやプロモーション資料、英語教育センターの学習リソースも調査した。また、短期留学の学生とのコミュニケーションや国際交流センター主催のイベントへ参加し、非公式な観察も行った。大学から倫理的面の許可を得て、データ収集と分析はガイドラインを遵守した。また、分析の完了時には、元の電子メールと学生の回答、および Nvivo 11 にインポートされたデータは削除した。

3.3 参加者

この研究では18名が任意の調査に参加したが、2017年から2019年までの短期留学プログラムに参加した学生の中から、多様な経験から様々な意見を抽出することを目的とした。これらの学生は、英語コミュニケーション科目（英語必須科目）を履修中、または履修済みであり、研究の焦点に関連している。性別、年齢、留学年度、過去の留学経験の点で多様性を確保した。また、サンプルサイズは大学が提供する様々な短期留学プログラムの側面を反映しており、研究の目的に対する多様な洞察を得る上で重要であった。表1に学生とプログラム概要を示す。学生名はすべて匿名である。

表1 短期留学参加者及び参加プログラム

名前（匿名）	性別	年齢	学年	留学プログラム	期間	留学経験
語学研修・研究研修						
1 スミレ	女性	21	2	語学研修,フィリピン	3週間	無
2 カナ	女性	19	2	語学研修,米国	3週間	無
3 アツシ	女性	20	1	語学研修,英国	3週間	有
4 ヒデキ	男性	22	3	語学研修,フィリピン	1ヶ月	無
5 シュウヘイ	男性	22	3	語学研修,米国	1ヶ月	有
6 チヒロ	男性	21	2	語学研修,英国	2週間	有
7 マコト	女性	20	2	語学研修,英国	3週間	無
8 スズナ	女性	21	3	語学研修,米国	2週間	無
9 ミワ	女性	20	2	研究研修,ドイツ	1ヶ月	無
10 シュリ	女性	20	2	研究研修,ドイツ	1ヶ月	有
11 マナノ	女性	24	5	研究研修,香港	1ヶ月	有

団体ツアー・視察ツアー							
12	タイセイ	男性	19	1	視察ツアー,タイ王国	10日間	無
13	ショウタ	男性	19	1	視察ツアー,タイ王国	10日間	無
14	リサコ	女性	21	2	団体ツアー,米国	10日間	無
15	ジュンセイ	男性	20	2	団体ツアー,米国	10日間	無
16	アオキ	男性	21	3	団体ツアー,米国	10日間	無
17	アヤネ	女性	20	1	団体ツアー,インド	10日間	有
18	ヒナタ	女性	21	2	団体ツアー,インド	10日間	無

3.4 分析手法

自由記述式の調査質問では、研究分野への概念的な近似性を保ちながら、新たな方向性に対して開かれた分析を行うことを注意した。データ収集後、第一著者によって帰納的および演繹的なコーディングを含む内容分析が実施された。これはNvivo11を使用し、異文化間シチズンシップ (Miles, Huberman & Saldaña, 2014) に基づくデータセット内のパターンとテーマを特定し、分析が行われた。このテーマの構築に向けて、振り返りの中にある意味を解釈することが、分析プロセスの主な目的 (Miles, Huberman & Saldaña, 2014) で、振り返りの内容を個々の項目に分解し、データ内の明確な概念を探した。最初のコード化は、短期留学に関連する異文化間シチズンシップや関連した側面に焦点を当てた。分析が進むにつれ、カテゴリーを細分化し、学生のデータをより反映するように改善した。分析後、これらのコードはさらに修正され、最終的なコード表 (表2 参照) に統合された。18人の参加者は一般化を支持しないが、本研究では、個人の視点と共通のテーマの解釈を通して、相互の影響 (Richards, 2003) を探った。解析の過程と結果に関し、本研究では研究者の焦点と研究上の関心が必然的に解析に影響するため、主観性があることを認める。一方で、長年に渡る教育者としての研究者の視点を取り入れることは、質的研究アプローチにおける意図的かつ貴重な側面であるだろう。これらの視点は、文脈の繊細な理解を可能にし、分析に深みと真実性をもたらす。質的研究において、教育現場における研究者の役割と経験に由来する主観性の認識は不可欠である。従ってこれらの主観性は制限とは見なされず、むしろ、解釈プロセスに不可欠なものとされ、データのより情報に基づいた文脈的な分析を可能にすると考えられる。また、これらの洞察を活用して、研究対象の現象に関する包括的な理解を提供することを目的とする。

4. 結果

4.1 調査結果の概要

表2は、学生の活動場面の過程ごとにコード化された項目とその数を示している。コード化された項目は、学生の振り返りの文章から抽出したキーワードやフレーズであり、それぞれが異文化間シチズンシップ教育に関連する要素を表している。数字は、これらをコード化し表現した学生の数を表している。このセクションでは学生の振り返りの中からコード化した項目において、どのような過程や要素を示しているかを分析した。前述の通り、本研究は個人の成長に焦点を当てたものではなく、短期留学と異文化間シチズンシップ教育に関連する短期留学の提供や実践に焦点を当てたものである。

過去の英語学習体験については、本質主義的な文化学習という観点の解釈が見られた (12名)。動機については、英語コミュニケーション能力を向上させるための動機づけについて (18名)、異文化間アイデンティティの発展 (15名)、将来のキャ

リア志向への動機づけ（9名）などが報告された。留学前の教育支援に関しては大学の支援が限定的だったと制度的支援に対する批判（8名）もあった。留学中の他者との交流に関しては、他の留学生と交流したこと（14名）や地元の人々と交流したこと（8名）が報告された。学生が国際的なアイデンティティを形成しているという自己報告もあり（12名）、特に他者からの新しいアイデアをどのように受け入れているかが顕著だった。しかし、一部の引率付きプログラム参加者において、英語を使用する機会がほとんどなかったなどのプログラム内容への批判もあった（8名）。留学後は、英語の学習に参加し、新しい異文化体験を求める動機が向上したとの報告があった（14名）。しかし、留学の制度的側面に対する批判もあった（8名）。留学前と留学後の動機と経験には類似性が見られたが、短期留学の経験については乖離が見られた。あるプログラム（研究研修、語学研修、学習ツアーなど）は、異文化間シチズンシップに関する経験を示唆し、他のプログラム（母校主催の引率付きグループ文化ツアーなど）はグループ外と交流する機会が少なく、プログラムも厳密であったようだ。短期留学を通じた学生の留学での各過程に関連するデータを紹介する。

表2 コードの概要

		学生数
短期留学前	過去の文化学習経験に基づく本質主義	12
	英語コミュニケーション能力向上への意欲	18
	異文化間のアイデンティティを育むことへの意欲	15
	将来のキャリアをサポートする短期留学	9
	制度的支援に対する批判	8
短期留学中	短期留学プログラムへの批判	8
	異文化シチズンシップの体験報告(明示的)	14
	国際的アイデンティティの形成	12
	他の国際学生との交流	14
	地元の人々との交流	8
	異文化シチズンシップにおける英語使用に関する報告	11
短期留学後	個人的な動機が高まったとの報告	14
	短期留学後の制度に対する批判	8

4.2 渡航前

渡航前の英語教育体験と参加理由について学生からの意見を述べる。過去の異文化学習に関しては、国の文化に基づく比較教育の実践が中心であったという。例えば、アオキは「授業のプロジェクトで、日本とアメリカの文化の違い、特に学生生活の違いについて学びました」（抜粋 1）、カナも「食やライフスタイルについてのプロジェクトで、日本とフランスの違いについて学びました」（抜粋 2）と述べた。このような報告からは、共通点よりも人々の違いに注目することで、国の文化比較が行われていることがわかった。報告されなかったが、異文化間シチズンシップに結びつくような形式的でない学習体験もあった可能性は否定できない。短期留学への参加理由に関しては、「グローバル」なアイデンティティを身につけることが主な動機と述べ、タイセイは「日本では色々な人と繋がるのが難しい」（抜粋 3）と答え、ショウタも「留学中は日本語が使えないので、新しい人と出会い、海外の文化を知ることができるのは楽しみ」（抜粋 4）と述べていた。これらから、短期留学が異文化学習や「グローバル」なアイデンティティの形成に繋がるという期待や、そ

のような成長は日本では得られないという思いが感じられる。しかし、「異文化」や「グローバル」は国の文化的理解と結びつけて考えられており、「もっとグローバルに理解したいので、このプロジェクトではアメリカの国の文化について学んでいます」(抜粋5)という発言や「日本ではグローバル化が進んでいるので、英語が重要だと考える人が多い。私もグローバルになることが目標です」(抜粋6)など、グローバル、アイデンティティを日本の多文化主義や英語学習に結びつける例もあった。英語とグローバル化との関連はキャリア上の利点とも関連しており、ジュンセイは「世界中の人が英語を使っている。留学を終えたら、たくさんの人と話したいので、英語力が必要です」(抜粋7)と、将来のキャリアや他者と関わりたいという動機を伴う例もあった。教育機関から受けたサポートに関しては、基本的な情報の提供にとどまり、プログラムの詳細や種類の区別が不十分であったという。そのため、プログラムや勉強について不明な点が多かったという。例えば、スズナは「インターナショナルはチケットの手配をただけです。留学についての教育は一切ありませんでした」(抜粋8)と不満を述べた。ショウタも「自分のプログラムについて、まだ十分把握していない」(抜粋9)と答えた。このような報告は、異文化シチズンシップが教育機関における滞在前の教育実践の中で明らかにされていないことを示すものである。

4.3 短期留学での体験談

短期留学の体験について、学生はプログラムのタイプによって異なる解釈を示した。まず、語学研修・研究型プログラムに参加した学生(スマレ、カナ、アツシ、ヒデキ、シュウヘイ、チヒロ、マコト、スズナ、ミワ、シュリ、マナノ)は、国際キャンパスでの文化グループツアーを通し、多様な文化背景への気づきや評価が見られ、海外キャンパスでの文化グループツアーに参加した学生(タイセイとショウタ)は多文化的な側面が異文化間シチズンシップ教育への関心の高まりに影響していた。これらの学生は多様な背景を持つ他の学生とのより多くの社会的活動(例：クラブでの夜、スポーツ大会、日帰り旅行、食事の共有)を通じた体験からの気づきや評価を報告していた。例えばシュリは「他の生徒と交流イベントに行きました。授業が終わった後、彼らと一緒に過ごすのはとても楽しかったです」(抜粋10)と述べている。ヒデキの「友達がたくさんできたし、外国人に会うのは初めての経験だった。多くの人と話すことができ、とても楽しかったです。自分にとってとてもプラスになった」(抜粋11)やアツシの「私は多くの国籍の人と一緒に勉強しました。たくさん話すことで、自分の英語力を鍛え、彼らのことを知ることができました。私たちは多くの共通点を持っていることがわかりました」(抜粋12)などがあった。これらの学生は、自分で時間を管理し、対人関係を構築する機会があり、異なる価値観や信念や行動様式を持つ人々と出会うことで共通点や違いを認識した。異なる価値観、信念、行動様式を持つ人々との出会いの特殊性を認め、いくつかの共通点を見出す例も見られた。マコトも「新しい人たちとたくさん話して、違いを感じました。もっと国際的な友達を作りたいので、また海外に行きたいです」(抜粋13)と、新しいアクセントを聞き、他の留學生と英語を練習し、さらに国際的な経験や友情を気づくことに強い関心を示していた。これらの学生は、プログラムの活動を通してだけでなく、社会的な交流から異文化間シチズンシップを育む機会があったことがわかる。例えば、チヒロは「私はいろいろな人と一緒に勉強しました。夜、一緒に遊んだり、料理を作ったりすることもよくありました。その人たちとのつながりが面白かったし、共通点がたくさんあることもわかった。その中で、自分が思っていたのと違う人もいて、考えを改めざるを得なかった」(抜粋14)と述べ

た。このように自分の考えを変えることは異文化間シチズンシップ的な繋がり
の基本的な例であり、他者への新しい理解も生まれる。異文化間シチズン
シップの繋がり
の基本的な例もあれば、新たな理解を得る例も示唆された。これらは、正式な
プロジェクトの規定による活動を通してというよりは、むしろコミュニティー
への参加を通し、形成されたと思われる。例えば、シュリが示すように「多
くの新しい友人とコミュニケーションをとることができたし、彼らからたく
さんの新しい考えを学んだ。自分とは違う考えを持っていることを知り、
その考えを今後に生かしたい」（抜粋 15）やタイセイの「地元の学生や留
学生と交流しました。人の考え方や趣味、人間関係について話しました。
新しい考え方を学び、自分の中に吸収しました。また海外に行きたいで
す」（抜粋 16）と意識の変化について同様の報告があった。短期留学
での異文化間の視点を構築するための変化が報告されていた。これらの
学生は、文化的に多様な文脈での経験を経て、新しい異文化の視点を持
つようになり、「彼らの現実を理解しようとする意欲と好奇心、そして行
動の変化」（Byram, 2008, p.190）が見られた。また、これらの
プログラムに参加した学生は、短期留学後に自分の経験や変化について
分析・考察することが多かったという。例えば、スズナは「新しい友人
と過ごした後、毎晩、話したことや新しく学んだことを振り返るために
日記を書きました」（抜粋 17）と述べた。自己認識や自信の成長を自
己報告した例もあり、国際的なキャンパスでの研究ベースのプログラム
について、マノは（抜粋 18）。「授業が終わった後、街を散策したり、
お互いのために料理を作ったりと、色々なことを一緒にしました。本
当に楽しかったです。友達と一緒に新しいことに挑戦したり、一人でも
できることがたくさんあることを知りました」と述べ、ミワも「自分
の良いところ、悪いところを知ることができた」（抜粋 19）と、自己
認識や自信の成長を報告し、自分の能力や可能性に気づいた。

他の学生（リサコ、ジュンセイ、アオキ、アヤネ、ヒナタ）は、大学
主催のグループツアーでは日本語が多用され、英語を話すチャンスが
少なかったと不満を感じていた。リサコは、以前の短期留学経験と比
較し「色々な学生と交流して英語を話した。でもアメリカでは日本語
ばかりだった」（抜粋 20）と述べた。このプログラムに対しては、
文化交流の面でも組織の判断に疑問を持つ声があった。例えば、ア
オキはアメリカでの文化交流に批判的だった「なんでもグループで
一緒にやらなければならない、自分たちでは何もできなかった。先
生が全て指示したが自分の力でやりたかったしもっとたくさんの人
とも会いたかった」（抜粋 21）と述べた。このグループツアーでは、
日本の文化を海外の学生に紹介するコミュニケーションイベントが
行われたが、ジュンセイは「時間が足りなかった。発表をして、簡
単にアメリカの学生と話したが、短かった」（抜粋 22）と指摘した。
アヤネは、異なる教育体験について話し、「現地の学生と話したが、
インタビューに関してだけだった。アメリカの大学生活について私
たちはインタビューしなければならなかった。もっと一緒に過
ごしたり話したりしたかったができなくて、あまり学べなかつた。」
（抜粋 23）と述べ、プログラム構成の厳粛さや交流の少なさを述べ
た。「また、プログラムに参加した学生の中には、短い出会いで行
われる組織的なコミュニケーション活動では、ステレオタイプに基
づく否定的な異文化体験をしたという学生もいた。ジュンセイは「
話すのが難しかった。彼は面白いことを言っていたが、私は同意で
きなかつた。日本人はもっと優しいと思った」（抜粋 24）と述べた。
これらの報告にあるような体験は、異文化間シチズンシップや、ウ
ェブサイトの声明文にある政策目標と結びついているとは言い難い
だろう。

4.4 短期留学後

短期留学後、同大学では学生が自分の経験を振り返るための教育指導は行われなかった。単位取得のために、全学生はレポートを日本語で書き、プレゼンテーションを行うことが義務付けられていた。シュウヘイは「私はレポートを書き、旅行についてのプレゼンテーションを行いました。文化について、ホテルについて、帰ってきてからの食事についてなど。すべて日本語でした」（抜粋 25）と述べた。これらの発表では、学生たちはプログラムの内容に関する基本的な情報や、渡航国に関する文化的側面を一般化した説明がされる傾向があった。さらに、モチベーションが高まったと主張していたにもかかわらず、短期留学後は、「新しい国際的な友人とオンラインでつながりたいが、最近では忙しすぎる」（抜粋 26）とタイセイは記述し、大学の他の関心ごとなどがある中で、交流の継続は限られていた。また、ミワのように、留学後に否定的な意見もあった。「4 週間も（日本での）授業が受けられず、日本に帰ってから遅れた分の学習を追いつくために一生懸命勉強しました。大変でした」（抜粋 27）。このように、留学プログラム終了後に異文化間学習を深めることは、他の課題に追われ、定着されない可能性がある。

5. 考察

この研究の主な発見は、文化的に多様な学習とコミュニケーションの文脈における短期留学の経験は、限定的ではあるが、異文化間シチズンシップの経験を提供するものであったということである。しかし、異文化間シチズンシップ教育は、短期留学前、留学中、留学後を問わず、体系的な方法では扱われていなかった。また、本研究の調査対象の大学における短期留学の実践では、国際化の方針と短期留学の現実との間で不整合が見られ、国際化の異文化的側面に沿った実践が必ずしもなされていないことが明らかになった。過去の英語学習経験や文化体験など、短期留学前後の教育機関の実践については、ほぼ同様の報告があったが、異文化間シチズンシップ教育や異文化間学習を促進する他の教育アプローチとの関連は明らかではなかった。一部のプログラムでは、他の留学生との交流を通じて、基本的な異文化間シチズンシップの経験が確認された。しかし、大学主催のグループツアーでは、国際的な繋がりを築く目的が達成されず、学生は不満を持って帰国した。この後者のグループにおける教育経験は学習に繋がったかもしれないが、学生同士の交流が制限されていると、国際的なアイデンティティを形成することは難しくなるだろう。

これらの学生の様々な軌跡から得られた結果から考察すると、留学前では、クラスでの文化学習体験が国家比較や事実に基づいた文化の違いに焦点を当てたものであったため、異文化間シチズンシップの準備には限界があったと考えられる。過去の文化学習経験やプログラム規定の影響により、新しい国際的・異文化的な視点を築くことよりも、事実に基づいた文化の違いに焦点が当てられて、異文化間シチズンシップとしての準備態勢は限定的だったかもしれない。異文化間シチズンシップ教育は、短期留学後に動機づけが報告されているにもかかわらず、短期留学の経験とは無関係な大学の教育方針や学びのサポートが制限される中で困難だったと思われる。異文化間シチズンシップは国際化に関する大学側の発言で確認することができたが、異文化間の次元を実践に統合する国際化プロセス（例：Knight, 2008）は、実際に同大学で国際化に関する大学の意向として異文化間シチズンシップが明記されながらも、正式な教育支援の実践は確認できなかった。短期留学での異文化交流から異文化学習は保証されるという考えや短期留学が自動的に異文化学習に繋がるという認識から、このように国際交流センターからの限定的な学習指導や支援となっているようであった。関連研究（Han, Li, Hongtao & Yuqin, 2017）と同様に、教育

機関の国際化方針を示す中で、学生は体系的なアプローチによって異文化間シチズンシップ教育の恩恵を受ける可能性がある。調査では、学生の動機についても調べたが、「グローバル」なアイデンティティを育成したいという動機があったが、異文化シチズンシップの認識調査（Golubeva, Wagner & Yakimowski, 2017）と同様に、学生のグローバルや異文化に対する理解は曖昧または単純であると考えられた。しかし、彼らの動機には、彼ら自身の理解に基づいて、異文化間シチズンシップを発展させることに興味があることを示す兆候が見られた。

次に、異文化間シチズンシップ教育が異なるプログラムによってどの程度サポートされているかを調査した。異文化間シチズンシップ体験に影響を与える短期留学の規定には、大きく分けて2つのタイプがあることが明らかになった：(1)他の留学生とより多くの時間を過ごす、多文化コミュニケーションの文脈における短期留学（抜粋 17-26）、(2)他者との交流を通じて異文化学習の機会を限定的に提供する、厳密に組織された短期グループツアータイプである。これらを比較すると前者(1)の方が（限定的ではあるが）、非公式なシチズンシップの経験を多く得られること、(2)のタイプでは、異文化間シチズンシップの概念に触れる機会が少なかったと示された。これらのプログラムでは、文化的に多様なコミュニケーションで他の留学生と接する経験が、特に社会化に基づく新たな異文化間観に繋がったようである（但し、単に他人と会うことがすべてのケースでシチズンシップに繋がるとは言えない）。

ここで考えられるように、短期留学での異文化体験後のこうした視点の変化は、基本的な「個人の学習・変化」（Byram, 2008, p.187）と関連していた。他のプログラムでは、プログラムの側面や短期留学の目的が達成されなかった点に対し、学生から批判があった。このような短期留学プログラムでは、国別の情報に焦点を当てたプログラム提供は容易かもしれないが、些か時代遅れの感があり、異文化間シチズンシップに沿ったものではないだろう。また、プログラムの厳格さから、他者との広範な交流を通じた独自に文化を探求する機会が与えられず、大きな不満が挙がる短期プログラムでは、調査からも明らかなように異文化間シチズンシップ教育に大きく貢献する可能性は低いと思われる。短期留学の実施において大学が政策における国際化に関する声明と実際の学生の能力開発を結びつけるためには、短期留学前に異文化間シチズンシップ教育に重点を置いたインプットの機会と支援を増やす必要があるだろう。そうでなければ、国際化における異文化間の繋がりという魅力的なイメージ以上のものを提供することはなさそうである。

6. 提案

本調査では、短期留学が異文化間やグローバルな視点を育むという大学の考え方が、全ての高等教育機関の短期留学の実践や規定において明らかなものではない。各大学で、研究に基づいた実践的な概念（例：異文化間シチズンシップ教育）に沿って、国際化の異文化的側面が取り入れなければ、大学の目指す目標達成は困難だろう。概念化には地域的な理解も含め、複数の方法が考えられるだろう。異文化間シチズンシップ教育(Byram, 2008)は、そのような理解も含めて、概念を表現する方法の一つにすぎないが、この論文では、教育機関の方針を示す教育計画と関連付けて提案する。海外との交流を通じて学ぶための基礎として、異文化間シチズンシップ教育の機会を導入することは、教育機関にとって有益であるだろう。短期留学で得られた成果は、短期留学後のサポートや課題を通して、将来に活かせる可能性がある。また、大学主催の引率付きプログラムよりも、自分で短期留学体験を選ぶことを大学が促した方が、学生にとってより有益だと思われる。このようなプログラムは、もっと多くの学生に興味を持ってもらえるかもしれないが、プログラムの種

類を明確にし、多様な文化的背景の中で自ら学ぶことのできる短期留学を希望する学生に対して強調すべきである。図1では、本研究の概念的な方向性に基づき、短期留学の教育実践への提案を示す。

短期留学前トレーニング

- 異文化間シチズンシップ教育に基づく異文化間学習を支援し、内省的学習機会を提供する。
- 本質主義、非本質主義の視点に対する学生の認識を深める。
- 短期留学の文化的背景の多様性を提示する。
- 異文化シチズンシップの概念について明確な内容を提供する。
- オンライン上の国際コミュニティで、他者との交流を通じ、関係構築の実践。
- 学生が異文化シチズンシップの目標を立てられるようにする。

短期留学中での経験

- 学生自身の計画と意思決定を通じて、学生の自立を促す。
- 大学主催のプログラムデザインにおいて、本質主義的で文化特化型の学習を避ける。
- 特定の文化に基づく学習より、文化的多様性を重視した学びを短期留学体験で提供する。
- 異文化シチズンシップと国際的アイデンティティ育成を目的とした、学生間のプロジェクトワークへの組み込み行う。

短期留学後

- 学生が自分の経験を紐解き、どのような学習が行われたか振り返りの支援をする。
- 学生が新たな学習目標を立てる際の支援をする。
- 異文化シチズンシップに関する短期留学の目標を再確認する。
- 異文化シチズンシップ、国際的アイデンティティに関連した新しい行動に焦点を当てる。

図1 実践における異文化間シチズンシップ教育促進

短期留学前の異文化研修で、現地の事実や慣習に注意することは大切だろう。しかし、自国文化の学習やその場所での「振る舞い方」に過剰に重きを置くことは、還元主義 (Holliday, 2012) の危険があり、違いに目を向けることでステレオタイプを固定化する可能性がある。学生は、本質主義的な視点だけでなく、異なる視点も大切だということを理解するように支援がなされるべきである (Hepple, 2017)。また、学生は、これらの両方の視点を大切にすることへの認識を深め、短期留学では文化的多様性に触れることが重要な学びである点を研修で伝える必要がある。さらに、国際的なアイデンティティを育てるための具体的な短期留学の学習目標を設定するために、異文化シチズンシップの概念を明確に説明することで、学生の短期留学参加前の「グローバル」や「異文化」に対する曖昧さを解消できると思われる。振り返り学習、すなわち異文化学習内容やシチズンシップの側面を再考し認知することは短期留学での交流を通して、異文化シチズンシップに繋がる土台となり得るかもしれない。文化的に多様な環境での短期留学体験は、他の留学生と一緒に学ぶことがある点も明確に認識されるよう伝えるべきだろう。大学が主催する引率付きプログラムは、実務的な利点があるかもしれないが、組織された活動での学習では、国ごとの基本的な文化交流における本質主義を避けて、短いグループプロジェクト

や他の人々との交流イベントなど、もっと自発的な社会参加の機会を作るべきである。留学前のサポートが限定的で、留学後も、学生が報告するためのサポートが受けられず、また帰国後の大学での学習や生活での懸念事項が優先されたことも挙げられていた。そのため、事後学習を広めて、英語学習や異文化学習への関心を高める方法を探ることが重要である。留学後の取り組みには、学生が異文化学習の成果を確認するため学習要素の重要性に関する研究 (Messelink, van Maele & Spencer-Oatey, 2015) も参考になるだろう。学生は、留学での経験や異文化シチズンシップの経験を振り返り、異文化体験に基づいた新たな異文化学習の選択肢や新たな活動の計画を立てることができるようサポート (Byram, 2008) が期待される。

本研究で提示された提案は、研究結果に基づいて理論的に根拠づけられており、同様の文脈における教育者および研究者の経験を反映している。これらの解釈は、特に教育機関の実践や留学経験における不備を対象としている。専門的な役割と洞察によって情報提供されているが、提案は一定の主観性を持ち、他の実践者にとって有益な実用的な指針を提供する可能性がある。これらの提案は、理論的には情報提供されているが、本質的な主観性を伴う解釈であることが認識されている。したがって、これらの提案の妥当性や様々な教育文脈での適用可能性を評価するためには、さらなる研究が必要である。

7. 今後の課題

本稿では、日本のある大学における短期留学の実践と規定について考察し、学生の短期留学体験を通して、異文化間シチズンシップ教育がどのように達成されたかを理解することを目的とした。18名の学生の報告書をもとに、プログラムに参加し、自主的に対人関係を築き、より文化的に現地での交流の多いプログラムを受講した学生は、報告書の中で、異文化間シチズンシップの経験を示唆し、正式な学習ではなく、自主的な社会活動を通じて、基本的な国際的繋がりを形成していた。これらのプログラムでは、学生がより自主的に対人関係を築き、英語を使う非公式的な機会が多くあり、そのような場では、異文化間シチズンシップがよりサポートされているようだった。

本研究において、学生数やプログラム数のデータが少ない点については、本調査の限界として認める。また、短期留学プログラムの種類、期間 (いずれも非常に短いものであったが)、留学先には大きな違いがあるにもかかわらず、それらをまとめて論じた。調査では、これらの学生の経験を把握し、その中にパターンを見出すことに努め、そのパターンを用いて、特定の教育機関における国際化の目標が実際にどの程度達成されたかを検証した。研究の詳細から、留学支援や異文化間シチズンシップ育成において、他の実践者の理解や他大学での教育改革に向けた内省の役に立つことを願う。より広範な環境でのさらなる研究は、短期留学プログラムの人気、国際化イニシアチブの中で、短期留学の重要性や高等教育機関の国際化政策における異文化シチズンシップの解釈、そしてかかるコストなどを考慮すると、非常に重要である。さらに、異文化間シチズンシップに関連した教育革新や、国際化教育への発展に向けた短期留学、異文化間シチズンシップ育成との関係を探る新たな研究が重要である。

引用文献

Baker, W., Boonsuk, Y., Ra, J. J., Sangiamchit, C., & Snodin, N. (2022). Thai study abroad students as intercultural citizens: Developing intercultural citizenship through English medium education and ELT. *Asia Pacific Journal of Education*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1080/02188791.2022.2096569>.

- Boonsuk, Y., & Fang, F. (2021). Re-envisaging English medium instruction, intercultural citizenship development, and higher education in the context of studying abroad. *Language and Education*. DOI: 10.1080/09500782.2021.1996595
- Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for intercultural citizenship*. Multilingual Matters.
- Byram, M. (2017). Introduction. In M. Byram, I. Golubeva, H. Han, & M. Wagner (Eds), *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship* (pp. xxvii–xxxiv). Multilingual Matters.
- Byram, M., Golubeva, I. Han, H., Wagner, M. (2017). *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship* (Eds). Multilingual Matters
- Fang, F., & Baker, W. (2018). ‘A more inclusive mind towards the world’: English language teaching and study abroad in China from intercultural citizenship and English as a lingua franca perspectives. *Language Teaching Research*, 22(5), 608–624. <https://doi.org/10.1177%2F1362168817718574>
- Golubeva, I., Wagner, M., & M. E, Yakimowski. (2017). Comparing students’ perceptions of global citizenship in Hungary and the USA. In M. Byram, I. Golubeva, H. Han, & M. Wagner (Eds), *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship* (pp. 3–24). Multilingual Matters.
- Hepple, E. (2017). Designing and implementing pre-sojourn intercultural workshops in an Australian university. In J. Jackson & S. Oguro (Eds), *Intercultural interventions in study abroad* (pp. 18–36). Routledge.
- Hernández, A. H., & E. Alonso-Marks. (2018). Cross-cultural sensitivity and intensity of interaction in study abroad: A developmental approach. *Porta Linguarum*, 30, 165–175. <http://dx.doi.org/10.30827/Digibug.54045>
- Holliday, A. R. (2012). Culture, communication, context and power. In J. Jackson (Ed), *The Routledge handbook of language and intercultural communication* (pp. 37–51). Routledge.
- Horibe, M. (2002). The internationalization of higher education in Japan in the 1990s: A reconsideration. *Higher Education*, 43, 65–84. <https://doi.org/10.1023/A:1012920215615>
- Han, H., Li, S., Hongtao, J., & Yuqin, Z. (2017). Exploring perceptions of intercultural citizenship among English learners in Chinese universities. In M. Byram, I. Golubeva, H. Han, & M. Wagner (Eds.), *From principles to practice in education for intercultural citizenship* (pp. 25–44). Multilingual Matters
- JASSO (Japan Student Services Organization). (2018). *Nendo nihonjin gakusei ryūgaku jokyō chousa kekka* [Results of the Survey on Japanese Students Studying Abroad]. Available from: <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2018.html> [accessed 11 April 2021]
- JASSO (Japan Student Services Organization). (2021). *History of JASSO*. Available from: <https://www.jasso.go.jp/en/about/organization/history.html> [accessed 18 May 2021]
- Jackson, J. (2020). The language and intercultural dimension of education abroad. In J. Jackson (Ed), *The Routledge Handbook of Language and Intercultural Communication*. (2nd ed, pp.442–456). Routledge.
- Ku, Kelly Y. L., Phillipson, S., & Phillipson, S. (2015). Educational learning theory. In J. D. Wright (Ed.), *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences* (2nd ed, pp. 238–245). Elsevier.
- Kinginger, C. (2009). *Language learning and study abroad: A critical reading of the research*. Palgrave MacMillan.
- Knight, J. (2008). *Higher education in turmoil: The changing world of internationalization*. Sense Publishers.
- Koyanagi, S. (2018). Impact of intercultural communication during short-term study-abroad of Japanese students: Analysis from a perspective of cognitive modification. *Journal of Intercultural Communication Research*, 47(2), 105–120. <https://doi.org/10.1080/17475759.2018.1435423>
- McCrostie, J. (2017). More Japanese may be studying abroad, but not for long. *Japan Times*, 9 August.
- Messelink, H.E., Van Maele, J., & Spencer-Oatey, H. (2015). Intercultural competencies: What students in study and placement mobility should be learning. *Intercultural Education*, 26(1), 62–72. <https://doi.org/10.1080/14675986.2015.993555>
- MEXT. (2017). Shōgakkō Gakusyū Shidou youryou kaisetsu – Gaikokugo hen [Elementary school curriculum and instruction guide: Foreign language]. Available at <https://www.econfn.com/ssk/kougi/syougakusidou.pdf> (accessed 10 April 2021) MEXT. (2021).

- ‘Gaikokujin ryūgakusei zaiseki jōkyō chōsa’ oyobi ‘nihonjin no kaigai ryūgaku-sha-sū’-tō ni tsuite [About ‘Survey on the enrollment status of foreign students’ and ‘Number of Japanese students studying abroad’]. Available at https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_gakushi02-100001342-01.pdf (accessed 12 May 2021).
- Miles, M. B., Huberman, A. M., & Saldaña, J. (2014). *Qualitative data analysis: A methods sourcebook* (3rd ed.). SAGE Publications Ltd.
- Ota, H. (2018). Internationalization of higher education: Global trends and Japan’s challenges. *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, 12, 91–105. <https://doi.org/10.7571/esjkyoiku.12.91>
- Porto, M. (2014). Intercultural citizenship education in an EFL online project in Argentina. *Language and Intercultural Communication*, 14(2), 245–261. DOI: 10.1080/14708477.2014.890625
- Saito, K., & Kim, S. (2019). Internationalization of Japanese higher education: Effective organization of internationally cooperative higher education programs. *Higher Learning Research Communications*, 9(1), 47–63. 10.18870/hlrc.v9i1.441
- Sugimura, M. (2015). The mobility of international students and higher education policies in Japan. *The Gakushuin Journal of International Studies*, 2, 1–19.
- Wagner, M., & Byram, M. (2017). Intercultural Citizenship. In Y. Y. Kim (Ed), *The International encyclopedia of intercultural communication*. Wiley & Sons.
- Yonezawa, A. (2014). Japan’s challenge of fostering ‘global human resources’: Policy debates and practices. *Japan Labor Review*, 11(2), 37–52.
- Yonezawa, Y. (2017). Internationalization Management in Japanese Universities: The Effects of Institutional Structures and Cultures. *Journal of Studies in International Education*, 21(4), 375–390. <https://doi.org/10.1177%2F1028315317706412>

付録

振り返り記述に関する質問項目（自由記述形式）

1. なぜ留学に参加したのですか？何を達成したかったのですか？
2. 文化について学んだ過去の教育経験について教えてください。
3. 過去の異文化コミュニケーション体験について教えてください。あなたは何を学びましたか？何がうまくいきましたか？
4. 留学中、異文化間コミュニケーションでうまくいった体験があれば教えてください。
5. どのような国籍の人と出会いましたか？
6. どのようにその人たちと関わりましたか？
7. 留学中の授業について説明してください。
8. 留学中の社会体験について説明してください。
9. 留学前、留学後、大学からどのようなサポートを受けましたか？
10. 留学から帰国後、どのような異文化学習をしましたか？
11. 自分自身について、どのようなことを学びましたか？
12. 他者についてどのようなことを学びましたか？
13. あなたにとって、グローバル／異文化シチズンシップとは何ですか？
14. その他、留学経験について何かご意見があればお聞かせください。